

日本婦道記

おもかげ

山本周五郎

青空文庫

二年あまり病んでいた母がついに世を去ったのは弁之助が七歳の年の夏のことであつた。幼なかつた彼の眼にさえ美しい凜りんとしたひとで、はやくから自分の死期を知つて泰然とそのときを待つていふところがあつた。ながい病びょうが臥がのあいだも苦痛を訴えたり思い沈んだりするようなことはなく、いつも明るい眉つきでしんどどこかを見まもつていふ風だつた。弁之助は学塾から歸つて来ると、病間へいつて素読をさらうのが日課だつたが、母はそのあいだ褥しとねの上にきちんと坐り、身うごきもしないで聴くのが常だつた、それは亡くなる五日ほどまえまで続いたのである。しだいに窶やつれてはゆくが面ざしはいつまでも冴さえて美しく、いつも瞠みはつていふような大きな眸子ひとみも澄みとおるほどしずかな光を湛えていた。臨終のときにはまるで白磁のような顔に庭の樹立のふかい緑がうつつて、なにかしら尊い画像をでも見るような感じだつた。

「よくおがんで置くのですよ」別れの水をとるときに叔母の由利がそばからこう云つた、
「このお顔を忘れないようによくよくおがんで置くのですよ、ようございませぬ」眼をつ

むればすぐみえるようになるまでよく見て置くように、諄くどいほど幾たびもそう云った。

ほうむりの式の済んだ夜、由利は弁之助を母の位牌いはいの前に坐らせ、燈明と香をあげてからしずかに云った。

「弁之助さんよくお聞きなさい、お母さまはお亡くなりになるまであなたのことをなによりも案じていらつしやいました、お亡くなりなすった今も、そしてこれからさきも、お心だけは此処ここから離れないで、あなたがお丈夫に育つよう、世の中のため、お国のためにやくだつりつばな人になるよう、いつもおそばについて護まもつていて下さいます、わたくしはお母さまからあなたのことをお頼まれ申しました、ふつつかなわたくしには及びもつかない役目ですが、できるかぎりはおせわをしてさしあげるつもりです、けれどもなにより大切なのはあなたご自身ですよ、叔母さまがどんなにつとめても、あなたが凜凛となさならなければなんにもなりません、これまでよりはいつそうお心をひき緊めて、人にすぐれたさむらいになるようしつかり勉強を致いたしましょうね」

口ぶりはしずかだつたけれど、きちんと端座した姿勢やまなざしには、これまで見たことのない屹きつとしたものがあつた。弁之助はびっくりしてまるで見知らぬ人の前へ出たような気持になり、はいと答えながらわれ知らず眼を伏せてしまった。……そのころ父の旗野

民部は勝山藩の大目付で、家には五人の家士と下僕が二人、それに下婢などもいてかなり賑やかだったが、父は役目が忙しいため家におちついてゐることは少なく、弁之助のことは殆んど叔母ひとりの手に任されてあつた。由利はそのとき十八歳だつた。からだつきもまるくふつくりしていたし、明るくて単純で、思い遣りのふかいやさしい気性で、どっちかというと彼にはあまい叔母であり、彼がきびしく叱られるときなどは哀れがつて泣きだすという風だつた。ごく小さいころから蔭になり日なたになつて庇かばつてくれたし、武家の子は質素にという意味で常には禁じられている菓子なども、叔母にねだれば三度にいちどは出して貰えた、殊に母が病みついてからいつそうふびんが増したようすで、ずいぶんわがままなことも許されて来たのである。

けれど母の位牌の前でそういう話があつてから、叔母の態度はにわかに変りはじめた。そのときの叔母の屹とした眼のいろは日が経つてもなごむようすがない、まえのようにあまえかかる隙は少しもみせないし、許されたわがままも段だんと禁じられる。食事のときも嫌いなお菜はよけて呉くれたのに、まるでわざとそうするほどしばしば膳ぜんへ載のる。箸はしをつげずに置くと「好き嫌いは武士の恥です」と云つて喰べるまでは立たせなかつた。「いつたいたいどうしたのだろう」弁之助には叔母のようすの変つたのがふしぎでならなかつた。

た。「どこかおかげんが悪いので、それであんなに不機嫌なのではないかしら」子供の頭でそんなようにも考えてみた。そしてもう少し経ったら、まえのようにやさしい叔母になって呉れるだろうと、……然しそれは結局かなえられない望みだったのである。

中秋の九月なかごろ、父の民部は御主君飛驒守信房のお供をして江戸へ立った。大目付から用人にばってき抜擢されたので、おそらくそのまま江戸詰になるだろうということだった。しゅったつする前夜、父は弁之助を呼んでこう云った。

「江戸へまいっておちついたらおまえもよび寄せるが、まず二三年はそのいとまもないだろうと思う。父が留守のあいだは叔母上の申し付をよくきいて、怠りなく勉強しなければいけない」

そして来年になったら剣法の稽古もはじめるよう。きつとわがまを慎んで叔母にせわをやかせるなど訓さとした。母が亡くなって間のないときだし、今また父が遠く江戸へ去ると聞いて、弁之助は胸がいっぱいになるほど悲しかったが、——でも父上がお留守になれば、こんどこそ叔母さまはきつとやさしくなって下さるだろう、そう思いながらこみあげてくる涙をじつとがまんしていた。父は彼に秘蔵の短刀を与え、その明くる朝はやく、五人の家士と下僕の一人をつれて立っていった。

父のしゅつたつを見送つてからすぐのことだった。学塾へゆくしたくをしていると、

「今日からは貞造をつれずにお独りで塾へいらっしゃるのですよ」と思いがけないことを叔母に云われた、弁之助はびつくりして叔母を見あげた、「どうしてですか」

「それは和助がお父上のお供をしていったからです」由利はそう説明した、「これからは貞造ひとりで屋敷の事を色いろしななければなりません、あなたはもう七歳におなりだから供をつれなくともおかよいなされる筈です」

「でもそれでは軽い者の子のようにみられるでしょう」

「なぜです、みられてもいいでしょう、身分の高さ低さで人間のねうちがきまりはしません、そんなことを云うのは思いあがりというものですよ」

まるでとりつくしまのない調子だった。弁之助は逃げるように屋敷を出たが、^{へい}塀を曲つたところでそつと涙を押しぬぐつた。

勝山藩は小笠原流の礼式をもつて世に知られているとおりに規式作法のやかましいところ

で、家臣たちの身分や格式もよそよりは厳しく、しかるべき武士の子は男でも供をつれるのがその時代のならわしだった。したがって独りで学塾へかようのは子供ごころにも肩身のせまいおもいだし、また的場下の辻に悪い犬がいて往き帰りにきまって吠えられる、赤毛のずぬけて大きい犬で弁之助の知っているなかにも袴を噛みやぶられた者が幾人かいた。ひとつにはそれが恐ろしくもあつたので明くる日そのことを訴えてみた。すると叔母は手をあげて彼の腰のあたりを指さしながら、

「あなたがそこに差していらつしやるのは何ですか」と、きめつけるように云った。

「犬がこわいなどという臆病者なら武士をやめてあきゆうどにでもなっておしまいなさい」
そして弁之助がなさけなくなつて、われ知らず手指の爪を噛もうとすると、叔母はその手をとつて強く打った。

「悪い癖だからやめなければいけないと申上げたでしょう、いちど云われたことはよく覚えているものです」

彼はつきあげてくる涙をけんめいに抑えながら、そのときはじめて叔母さまはもう先のようにやさしくなつて呉れないことを悟つた。

冬になると城下町の三方にみえる山やまは重たげに鼠色の雲を冠り、それが動かなくな

ると重ちようじよう畳たる峠にいくつともなく白いものが積りだして、やがて里へも雪の季節がやってくる、その年のはじめての雪は例の少ないほどはげしい吹雪だった。まえの夜から降りだしたのが明け方には二尺あまりも積り、なおも暴あらかあらしい風とともに乾いた粉雪が霏ひ々と降りしきっていた。朝食を済ませて通学のしたくにかかる間もなく、弁之助はきゆうに腹が痛むと云いだした。

「どこがお痛みですか」

由利はそばへ寄って手を当てた。

「ここですか、それともこのへんですか」

「もう少し上です」

「ここですか」

そう云いながらじつと弁之助の顔色をみつめていたが、ふときびしい調子になって、

「弁之助さん、あなた雪が降るので塾へゆくのがお厭いやになったのですね」

と云った。弁之助はかぶりを振ってそうでないと答えようとした。然し由利はそれより早く、「こちらへいらつしやい」

と云い、彼の手を掴つかんでぐんぐん玄関のほうへひきずっていった。

「叔母さま」

弁之助はそう叫んで手をふり放そうとした。由利はひじょうな力でそれを押えつけ、はだしのまま玄関から門へ、さらに門から道へと出ていった。……天も地もまるで雪けむりに閉されたようにみえた、上から降つて来るものと、吹きつける風に地上から舞い立つものがいり混り、渦をなして揉みあいながら颯さつと片ほうへなびくかとみると、巻き返して宙へあがり、大きく揺れながらどつと崩れかかる。それを真向にうけると眼口を塞ふさがれて息もつけない感じだった。由利はそうさせまいとする弁之助をずるずるとなかばひきずりながら、走るような足どりで下元禄というところまでゆき、平等院という菩提寺ぼだいじの墓地へとはいっていった。弁之助はわけのわからぬままに蒼あおくなった。どうされるのだろう。叔母のようすには心をぞつとさせるようなものがあるし、つれこまれたところが墓地だといっただけでも、子供の頭には魘おそわれるような恐怖が生じた。由利はそのまま彼を母の墓前へつれてゆき、雪の上へはげしくひき据えた。それから膝ひざと膝をつき合せるようにして自分も坐ると、唇をみえるほどふるわせながら云いだした。

「よくお聞きなさい弁之助さん、わたくしは亡くなったお母さまにお頼まれ申して、及ばずながら今日までおせわをしてきました、けれどあなたはお母さまのお望みなさるような

武士らしい武士になることはできないようです、喰物の好きこのみは直らず、犬をこわがったり、これしきの雪に学問を怠けようとしたり、それも腹が痛いなどと嘘まで仰しやつて……」

三

「こんなありさまではりっぱな人になれないばかりでなく、やがてお父上のお名を汚すようにもなりかねません」

と、由利はするどい調子で云いながら、断乎とした身ぶりで懐剣をとりだした。

「わたくしにはこれ以上のおせわはできません、そしてこのようなお子にしてしまったのはわたくしも悪いのですから、亡くなった方へのお詫^わびに此処であなたを刺して自害します、弁之助さん、お母さまのお墓へご挨拶をなさい、お手を合せて……」

「堪忍して下さい、おゆるし下さい叔母さま」

彼はひきつけるような眼で由利を見あげ、全身をわなわなとふるわせながら叫んだ。

「弁之助が悪うございました、これからは気をつけます、喰べ嫌いも致しません、塾へも

ちゃんとかよいます。臆病も直します、決して爪も噛みません、叔母さま、おゆるし下さい、こんどだけおゆるし下さい、叔母さま」

「あなたはそんなに死ぬのがかわいいのですか」

「いいえ」

紙のように蒼白くなった顔をあげて彼は強くかぶりを横に振った、「いいえ死ぬのがこわいではありません、ただ父上のお名を汚すと仰しやられたのが、……それが……」

雪まみれの顔を両手で掩おほつてわつと泣きだした弁之助の姿を、由利はぎゅつと齒をくいしばったまま冷やかに見まもっていた。

弁之助はその夜、自分の寝所へはいつて燈を消すと、闇の空間をみつめながら、呟つぶやくような声で「お母さま」と、呼んでみた。するとあのとき以来わすれていた母の面影が、絵のようにまざまざと闇のなかに浮きあがった。それはよく覚えようとしてあんなにつくづくと見た臨終の顔ではなく、いつも明るい眉をして、しんとどこかを眺めているという風な、やさしい美しい日のおもかげだった。彼はもういちど「お母さま」と呼んだ、美しい母の顔は彼のほうを見て頷うなずくように思えた。澄みとおるような大きな眸子は笑っていた。彼はきつく唇を噛みしめながら噎むせびあげた。——やっぱりお母さまがいちばん自分を可愛

がつて下すつた、誰だつてお母さまがして下さるように親切にして呉れる者はない。そしてお母さまは今でも自分の側について下さる。弁之助が世の中のためお国のためにやくだつりつばな武士になるようにと、そばについて護つて下さるんだ。彼はそう思いながら、囁ささやくような声でそつとこう云つた。

「お母さま、弁之助はきつと人に負けないりつばな人間になります、お母さまがお望みなさるような武士らしい武士になります、そうしたらお母さまは褒めて下さいますね」

誰のためでもない母のために、きつと人にすぐれた武士になってみせる。幼ない彼は心をこめておもかげのひとにそう呼びかけるのだった。

雪の墓地で懐剣をつきつけられたときの恐ろしさと、夜の暗がりでまざまざと母のおもかげを見たことが、幼弱な彼の心をはげしくふるい立たせた。自分でもうまれかわつたような気持だった。そばにはいつも母のたましいがついていて呉れる、それが常に心の軸になつていた。叔母はその後もきびしかった。なにかあるとすぐにあなたは世間のお子とは違うのですよと云う。

「あなたにはお母さまが無いのですからね、人と同じことをしていたのでは『母親が無いから』とすぐに云われます、武士の子がそんな蔭口をきかれるのは恥ですからね」

弁之助はおとなしく「はい」と答える。然しもう決してあまえるような眼では叔母を見ようとしなない、眉つきにも、ひき結んだ口くちもと許もとにも、子供には稀まれな意志のあらわれといった感じがみえ、これまでのようにたやすく話しかけることもなくなっていた。……春が来て雪が消えると、学塾からの帰りに彼はよく平等院へまわって母の墓をおとずれた。時刻に遅れると叔母に叱られるので、いつもほんの僅かしかいられなかったが、墓標の前にかが躓んで合掌しながら、口のなかで色いろ母に話しかけたり、途中で折って来た木の枝を挿したりしていると、かなしいほどたのしく心うれしい感じだった。道に草が萌え、花が咲きはじめると、彼は色の変ったすみれ堇を根ごと抜いていつては墓のまわりに植えた。

「お母さまは花がお好きでしたねえ」そんなことを囁やきながら、……そして来年の春になつて、その堇の群がいつぱい咲きだしたらどんなに美しいだろう、そう空想して胸をおどらせていたが、間もなく叔母の手でそれはみんな抜き捨てられてしまった。

「お墓のまわりにはしきみ柘しきみのほかに草花などを植えるものではありません、こんなことをすると人にわら囁わらわれますよ」

そして塾の帰りなどに寄りみちをするといつて厳しく叱られた。彼が父にあてて、早く江戸へ呼んで呉れるようにと、たびたび手紙を出すようになったのはその頃からのことで

あつた。

四

その年の秋には由利は結婚することになっていた。相手は藩の重役の長男で、やはり重役の三宅五郎左衛門という人が仲人だった。それは三年まえからの約束だったが、あによめ 嫂の病臥とそれにつづいた家庭の事情とで延び延びになっていたのである。そして今年の秋こそというその期日が近づいてくると、由利はこんどもまた延期をすると云いだした。弁之助には精しいことはなにもわからなかったが、秋のはじめに仲人の三宅五郎左衛門がしばしばおとずれ、叔母とながい時間はなして帰るのを見た。……夜になって寝るとき燈を消してからじつと闇をみつめて「お母さま」と囁やきかけ、母のおもかげを呼び生かしながら、その日あつたことを話し、また望ましいことをたのんだり約束したりする。それはなにより楽しく欠かしたことの無い習慣になっていたが、そのじぶんはよく叔母が一日も早く嫁にゆくようにと祈つたものであつた、そうすれば父が自分を江戸へひきとって呉れるだろうと思つたから、……然し冬になつても、その年が明けても、叔母は嫁にはゆかなかつた

し、仲人の訪ねて来ることもなくなつた。弁之助はやがてそんなたのみの空なことを知り、自分の勉強に精をだしはじめた。

彼は八歳の春から藩の道場へもかよいだしたが、九歳になると学塾での成績がめきめきとあがりはじめ、いつからか秀才という評判さえたつようになつた。叔母もそれを聞いたのであろう。或るときいつものきびしい調子で、

「そんな虚名に惑わされてはなりませんよ」と注意された、「あなたはもうすぐ江戸へいらつしやるのですから、田舎で秀才などといわれる者も江戸へゆけば掃いて捨てるほどものですからね、つまらぬ虚名におもいあがるようだと後悔しますよ」

それはそのとおりだと思つたが、虚名という言葉が彼にはくやしかつた。掃いて捨てるほどもという表現も聞きのがせなかつた。それなら秀才ということ虚名でなくしてみせよう、掃いて捨てられるなかまからぬきんでてやろう、そろそろ意地のである年ごろになつていた彼は、そう考えて叔母がきびしくすればするだけその先を越すような気持になり、学問にも武芸にもしやにむに励んでいつた。あとからふりかえると、われながらよくあれが続いたと思う。まるで弓弦を張つたように緊張した明け昏くれであつた。僅かに寢所へはいつて、燈を消して、母のおもかげを闇のなかに描きながら、「お母さま」と呼びかける

ときだけが、その僅かな時間だけが、なにものにも代えがたい慰めでもあり、心の柱もなつて呉れたのである。

こうして十一歳になつた年の秋のはじめに、彼の待ちに待つたときがやって来た。江戸の父から出府するようという知らせがあつたのだ、どんなに大きなよろこびだつたらう、叔母の顔が蒼ざめて、眼には涙を溜め、あれこれと好きな物を料理して呉れたり、思いがけない^{いた}^{なみだ}^たぬわりのみせをみせて呉れたりしたが、彼にはまるで眼にもはいらなかつた。そして母の墓とわかる悲しさのほかに何のみれもなく、迎えに来た家士と下僕をせきたてるようにして立つていった。……田舎で秀才といわれる者も江戸へゆけば、そう云われた叔母の言葉が頭に刻みつけられていたので、出府するとすぐから勉強にかじりついた。主家のみ屋敷は上野池の端にあり、ちよつと出ればけんぶつする場所も少なくなかつた。父も少しあるいてみるように云つたが、江戸詰の者に負けたくない田舎者と嗤われたくないという考えから、なにごとくも措いてかえりみなかつた。

「そんなに詰めてしても身につかぬだろう」

父の民部はときどきこう云つた。

「学問というものはただ覚えるだけでは役にはたたないものだ。もう少しゆとりをもつて

よく噛み味わうようにするがよい、頭をやすめることも勉強のうちだから」

けれども弁之助にはもう習慣になつていたので、詰めてすることも努力ではなかつたし、休息の欲望などはまったく感じなかつた。

「叔母にみつちりやられたとみえるな」

父はそう云つて笑うこともあつた、彼は黙つて脇のほうを見ていた。父上はなんにもご存じないのだ。自分がこのように励みだしたのは母のおもかげに支えられたからである、叔母に躰しつけられたのではなく、かえつて叔母の手から逃げたのだ。きびしすぎる叔母から逃げて母の記憶をよびおこしてから、自分のほんとうの勉強が始まつたのだ。——この事実をお知りになつたら父上はどうお考えなさるだろう。いつそ申上げてみようか。彼はそう思ったが、やはり黙つて脇のほうを見ていた。

叔母からはおりおり音信があつた。師山の大師堂へ紅葉を観にいったとか、九頭竜くずりゅうに下り鮎あゆがみえたとか、鶴が峰にもう雪が積りだしたとか、故郷のやまかわと季節のうつりかわりを記したものが多かつた。江戸は繁華でこそあるがどこもかしこも家やしきばかりで眼をたのしませる風景の変化もなく、降ればぬかり照れば埃ほこりだつ道や、往來の人びとのけたたましく罵ののしり喚くこえなど、すべてがうるおいのない暴あらしい感じだつたから、

おとずれの文字に写された故郷の風物は云いようもなくなつかしかった。けれどもどういう気持ちで叔母がそれらの手紙を書いたかということも考えてもみなかったし、叔母に対してなつかしいと思うようなこともなく、手紙は貰いながらいちども返事は出さずにしまつた。

五

由利の云ったことは誇張ではなかった。彼は十二歳の春に御主君飛騨守の御前に召されて大学の講義をした。その席には多くの家臣も列してひじょうな好評だった。それは藩邸における彼の才能と位置をきめるものだったが、明るる年の三月、昌平坂学問所へ入にゆうこ入ことこ覚うすると同時に、秀才とはどういうものかということを知り、またその数の少ないことを知って心からおどろいた。

「お母さま、ほんとうに世間はひろいものですね」

出府してからも毎夜のきまりになつておもかげとの対話に、彼はおとなびた口ぶりでよくそう囁やいた。「勝山藩で頭角をぬくくらいはたいしたことではありませんでした

よ、けれど弁之助は負けはしません。いまにきつと昌平黌でも人の上に出てみせます、お約束しますよ」

母のおもかげはあのころと同じように明るい眉をして、澄みとおった美しい眸子で頬笑みかけて呉れた。彼はその頬笑のまぼろしに慰さめられ、気づけられるように思つてひたむきに勉強した。

こうして弁之助は十五歳になった。そしてその春の学問吟味には群をぬく成績をみとめられ、仰高門講堂で講書をすることを許された。仰高門の講義は学生のほか一般の処士町人らにも聴講させるもので、ここで講書するようになれば学問所の学生としてはいちにまえなのである。家中の人びとは席を設けて祝つて呉れた、そしてそのことが国許へも伝わったのであろう。暫らくして叔母の由利から祝いの手紙が届いた。「お祝い申上げそろ」というごく簡単なものだったが、「さつそく平等院へまいり、御墓前にてめでたき仔細あらまし申しつぎまいらせそろ」うんぬんという一節がはげしく胸を刺した。弁之助は手紙を持つたまま眼をつむり、ふかくふるえるように溜息をついた。平等院の墓地がありありと見えるようだった。塾からの帰りにまわりみちをして、ひっそりと墓標の前へ躡みにいっただのこと、雪が溶けて土のやわらいだじぶん、花萼を抜いていっては植え集めたこと、

そしてやがてそれをみんな叔母に抜き捨てられたときの悲しかったことなど、切ないほど鮮やかに思いだされた。……彼が小姓にあがったのはその年の夏のことであった、小姓といつても学問所の業があるので、ほかの者のように日にち御殿へ詰めるのではなく、定日に伺候して御主君に経書の講義をするだけの役だった。然しむろんこれは将来の出頭を約束するものなので、家中の人望はますます大きくなるばかりだった。

その年が明けると間もなく、参覲さんきんのいとまで飛驒守ひだのかみが帰国するとき、弁之助も供を申付けられて故郷へ帰ることになった。そのことがきまった日の宵であった。父の民部は夕食のあとで彼を居間へ呼び、あらたまつた口ぶりで話があると云った。

「おまえはどうやら叔母を怨んでいるようすだな」

思いがけないときに思いがけない言葉で、彼にはちよつと返辞ができなかった。

「怨んでいるほどでなくとも嫌っていることはたしかであろう、そうではないか」

「それは、どういうわけでしょうか」

「隠すことはない父にはよくわかつていた」民部はじつと彼の眼をみつめながら云った、
「おまえはひところ頻りに江戸へ呼んで呉れと手紙をよこした、叔母の躰けのきびしさに堪えかねていることは察しがついたらけれど、そしておまえがふびんでなくはなかったが、

父はいちども返事をやらなかった、なぜやらなかったか、武士ひとりいちにんまえに育てるといふことはなまやさしい問題ではない、ただ人間としていちにんまえにするだけならばつだが、武士は農工商の上にたつものとされ、生れながらに一つの特権を与えられる。

それはこの国と御主君を守護し、いざというとき身命を捧^{ささ}げてはたらくからだ。然しこのように世が泰平で、身命を捧^{ささ}げてはたらく機会のない時代には、その特権は決して望ましいものではない、よほど廉潔の心をかたくし正真のたましいをやしなわぬと、それは世を誤まり人を毒す、したがって武士らしい武士を育てるには、躰ける者も躰けられるものもなまかなことではむずかしいのだ、いつてみればそれは一つのたたかいだ、怠けたい心、自分にとらわれる心、易きに就きたい心をつねに抑制し、絶えず鞭打って鍛えあげなければならぬ、幼ないおまえには苦しいことが多かつたろう。それは、よくわかつていたが、それでは叔母は苦しくなかつたと思うか」

民部はそこでちよつと言葉を切つた、弁之助の胸にその言葉がどうはいつてゆくかを見るように、それから更にしづかな口ぶりでこう続けた。

「幼ないおまえをそのようにきびしく躰けることは、躰けられる者よりなん倍か苦しく辛いものだ、鞭より飴^{あめ}のほうが甘いことは三歳の童にもわかる、わかつていながら鞭を手に

しなければならぬ者のたちばを考へてみるがよい、そのうえに、叔母は自分の幸福をすててしまつたのだ」

いつか眼を伏せ頭を垂れていた弁之助は、そこでびつくりしたように父を見あげた。

六

「おまえは知らぬだろうが、あのころ叔母にはまたとない良縁がきまつていた。身分からいつても人物から云つてもまたとない縁だつた、さきも熱心だつたし叔母も望んでいた。結婚していたらおそらく人に羨まれるような幸福に恵まれたことだろう、けれども由利はそれを断つた、仲に立つた者がずいぶんくだいたようだ、然し結婚もたいせつではあるが自分にはげんざい母を無くした甥おいがある、亡くなつたひとにも頼むと云われたし、云われなくともこの甥を捨てて嫁にゆく気持は自分にはない、そういつてきかないのだ、父からも色いろ申してやつたが、結局は破談にしてしまつた、そして今でもあれはおまえが成人するまでは旗野にとどまると云つてゐる、弁之助……おまえも十六歳になつた、少しは人の心のうらおもてもわかる年ごろだ、こんど勝山へ帰つたら叔母に礼を云わなければな

るまいぞ」

弁之助は頭を垂れ両手で膝をかたくつかんだまま返辞もできずにいた。あの雪の日の恐怖の瞬間が今こそ違つた角度からあらためて思いだされる、武士らしい武士に躡けることは一つのたたかいだという言葉は、今こそ彼にあつたことの真実を示して呉れたのだ、――そうだ、自分が苦しかったよりなん倍も叔母上は辛い苦しさを忍んでいたのだ、幼ない自分にはわからなかつたがあのかきびしい躡けの蔭にはやっぱりあまくやさしい叔母の涙がかくされていたのだ。彼には十年ぶりでほんとうの叔母を見るような気持がし、あふれくる涙を押えることができなかった。そして、出府して来るときには思いも及ばなかつた再会のよろこびを胸に描きながら、飛驒守の供をして勝山へ帰つた。

彼が期待したほど再会はたのしいものではなかつた。成長した彼を迎えて、叔母の眼はいつとき涙に濡れたが、挙措にも顔つきにも屹きつとしたものが消えず、少し瘦やせたかとも見えるからだは鎧よろいでも着ているような感じだった。もつとうちとけた、むかしのやさしい叔母に触れたい、あまえるともではゆかなくとも、姿勢のない心と心を触れ合せたい、そう思つた彼は夕食のあとであらためて叔母の居間をおとずれたけれど、相對して坐るところのほうが自然とかたくなり、どうしてもくだけた口がきけなかつた。

「少しお痩せになりましたね」

そう云うと叔母はちよつと肩をすぼめるようにし、僅かに口許へ微笑をうかべた。

「ながいことずいぶん私がご苦勞をおかけしましたから、ほんとうに有難うございました」
「まだそれを仰しやるのは早うございましょう」

叔母はうちかえすようにこう云った。

「あなたはようやく十六におなりなすつた、これまではどうやら順調にご成長なさいましたがいせつなのはこれからさきのご修業です、わたくしに礼を仰しやるのは、あなたがりつぱに成人してご結婚もなすつてお家の跡目をお継ぎなさるときのことです、それまではわたくしのことなどお考えなさる必要はございません」

そんな心のひまがあつたらそれだけ勉強をなさい。そう云つて叔母は屹と姿勢をただすのだった、茶を馳走になつて、いいようもなくもの寂しい気持で彼は叔母の居間から出て来た。

その夜は早く寢所へはいつた。あしかけ六年ぶりで寝る部屋である、壁も襖も懐かしかつた、天井も長押も、眼にいろものすべてが幼ない日の記憶をよびさまして呉れる。彼は古い友だちにでも逢つたように、ながいこと部屋の内を眺めまわしていた、それから夜具

の中にのびのびと身を横たえ、囁やくようにしずかなこえで「お母さま」と呼びかけた、
「弁之助が帰ってまいりましたよ、ずいぶんお久しぶりですねえ」

そのとき寝所の外の廊下に、由利が身をひそめて彼の囁やきを聞いていた。膝をかたく息をこらして、暫らくのあいだ弁之助の独りごとを聞きすましていたが、やがてしずかに立ちあがり、足音をしのんでそこを去った、それから仏壇へはいつてゆき、仏壇をひらいて燈明をあげ香を炷いた。鎧を着たような身構はもうなく、表情もなごやかにゆるんで、双の眼にはあたたかな涙さえうかんでいた。由利はしずかに坐り、合掌しながらじつと仏壇を見あげていたが、間もなく両手で面を掩いながら、こえをひそめて泣きだした。肩がふるえ、おえつ嗚咽の音がくくともれた、まるでよろこびを訴えるかのように、やや暫らく噎びあげていたが、やがてまたしずかに仏壇を見あげながら、しみいるようなこえで囁やきかけた。

「あね上さまお聞きあそばしまして、お母さまと呼ぶあの弁之助さまの声を、……わたくし弁之助さまにはずいぶんお辛く致しました、きびしすぎました、あれほどにせずともよかったですは自分でも承知しておりました、でもあね上さま、わたくしにはあれよりほかに方法がなかったのです、子供をりっぱに育てあげるもあげぬも母のちからと申します。亡

くなつたあなたを忘れさえしなれば、あなたのお美しいおもかげを忘れさえしなれば、母親の記憶さえちやんとしていれば、弁之助さまはきつとりつぱにご成長なさる、どうしてもあね上さまを忘れさせてはならない、わたくしはそう信じました、そしてそのためには、由利はきびしすぎなければなりませんでした、あの子の心をしっかりとあなたにつなぎとめるために」

由利はあふれてくる涙を押しぬぐつた、唇のあたりにあるかなきかの微笑がうかんだ。「あの雪の日の折檻せつかんの夜から、お母さまと呼びかける声をお聞きでございましょう、お十六になつた今でも、弁之助さまはあのようにあなたをお呼びしています。おそらくもうあね上さまをお忘れなさることはございませぬ、お母さま……と呼ぶあのやさしい声、由利は憎い叔母になつた甲斐かひがございました」

青空文庫情報

底本：「山本周五郎全集第二巻 日本婦道記・柳橋物語」新潮社

1981（昭和56）年9月15日発行

1981（昭和56）年10月25日2刷

初出：「婦人倶楽部」大日本雄辯會講談社

1944（昭和19）年8月

※初出時の表題は「母の顔」です。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井和郎

2019年5月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

日本婦道記

おもかげ

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 山本周五郎

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>